



錦鯉の池の水換え – どのくらい、どの頻度で

h2koi.com · 2026-08-04

要点

- 水換えの目的は三つ。ろ過で減らない硝酸塩と溶存有機物の希釈、KH（炭酸塩硬度）の補充、そして過密池での成長抑制物質の低減です。
- 目安は週に1〜2割（10〜20%）。あるいは毎日の少量注水。まとめて大きく替えるより、少量をこまめにが基本です。
- 水道水は必ずカルキ（塩素・クロラミン）を抜いてから。塩素はろ過バクテリアも殺します。水温差も小さくします。
- 数値が悪いからと大量換水で「直そう」としないこと。急激な変化そのものが鯉への負担になります。

水温	給餌の状態	換水の目安	気をつける点
25℃以上	一日数回、しっかり与える	週1〜2割。二回に分けるか、毎日の少量注水	溶存酸素が下がりやすい時期。夜間の落ち込みに注意
18〜25℃	通常の給餌	週1〜2割が基本	もっとも管理しやすい水温帯。ここで習慣をつくる
10〜18℃	回数と量を絞る	隔週〜週1回、1割程度	ろ過の働きも落ちる。餌を減らしたら換水も減らす
10℃未満	餌止め、低活性	大幅に減らす。水温差の小さい補充にとどめる	底の水を動かさない。冷水を大量に入れない

塩素とクロラミンは致命的です。水道水をそのまま池へ落とすことは避けてください。塩素は鰓上皮を直接傷めるだけでなく、ろ過材に定着した硝化菌を殺します。ろ過が飛べば、数日後にアンモニアと亜硝酸が立ち上がり、水換えをした池のほうが悪くなります。さらにクロラミン（塩素とアンモニアの結合体）は曝気だけでは抜けません。チオ硫酸ナトリウム系の一般的な中和剤は塩素の部分のみを中和するだけで、結合していたアンモニアはそのまま池に放たれ、あとはろ過が処理することになります。クロラミンに対応した中和剤を、注水と同時に上流側で確実に効かせてください。

H2Koiがすること。産業用グレードのセンサーで、水温、pH、溶存酸素（mg/L および飽和度%）、導電率、濁度、アンモニウム（NH₄）、硝酸塩（NO₃）を連続して直接測定します。ORPはオプションです。そこからKH（0〜20 dKH）、NH₃、亜硝酸、塩分、TDSを演算して表示します。センサー面はセルフクリーニングのワイパーが清浄に保ちます。狙いは、値が動き始めた段階で気づく手がかりを出すことです。

H2Koiがしないこと。KHは滴定ではなく演算値です。GHは表示しません。病気や寄生虫の検出はできません。そして、何かを防ぐものではありません。気づくのが早くなるだけです。